

あとがき

今回の展覧会はコラージュのみで構成されたマックス・エルンスト展である。そのコラージュもエルンストが初めてコラージュを作成した1920年の作品からいわゆるコラージュ・ロマンの諸作品を経て、最晩年の1974年の作品に至るまで28点の展示で、ほぼM・エルンストのコラージュの仕事の全容を示すものである。

恐らくM・エルンストのコラージュだけの展覧会はこれが始めてではなかろうか？学生時代からM・エルンストに興味を持ち続けてきている私としては是非ともやりたかった展覧会である。というのもM・エルンストからコラージュを除けば彼の芸術は成立し得ないと言えるほど彼のコラージュの意味は大きいこと、さらにシュルレアリストとして最初にこのコラージュという手法を開発し確立したのはM・エルンストであること、によるものである。一昨年12月の「M・エルンスト、ケルンのダダ展」(Fiat modes pereat ars, 石版8点を中心に展示)に続き、この展覧会が実現できたことを嬉しく思っている。数えてみると当画廊オープン以来6年半になるが、エルンスト展はこのコラージュ展を含め6回に及ぶ。毎年開催している勘定になる。

ところで、シュルレアリスムの画家は沢山いるけれども、私はまずM・エルンストを第一に推す。ミロ、タンギー、マグリット、デルポー等それぞれに資質、スタイルが異り个性的で面白いのであるが、M・エルンストはなかでももっとも硬質で、実験的で、ロマンチックで、新鮮である。学生の頃からコラージュ・ロマン「カルメル修道会」、「慈善週間」、「百頭女」等を画集でくりかえしみていままなお飽きないのであるが、ただいま現実にその原図を手にしてひそかに触ったとき、その興奮の度合は大きかった。写真印刷ではコラージュした部分はよく分らないし、実物をみても一寸分りづらいのである。つまりそれほど貼りかたが丁寧なのである。これには感嘆した。

この展覧会のためにカタログのテキストとして巖谷國士さんから「コラージュ・シュルレアリスト」、本江邦夫さんから「白鳥はとてもおだやか……」をそれぞれご寄稿いただいた。おのおのの専門分野からの論稿で、展覧会をご覧いただくと同時にぜひともお

読みいただきたいと思っている。なお、M・エルンストのコラージュについてはエルンスト学者の Werner Spies 氏による「MAX ERNST COLLAGEN」(1974, Du Mont)の大著を見過すわけにはいかない。(残念ながら邦訳はまだない。)

最後に、この展覧会のためにご協力いただいたブルスベルク画廊(G. Brusberg, Berlin)のブルスベルク氏に厚く御礼申し上げる。私自身のコレクションだけではとてもこの様な展覧会を開催することは不可能であった。距離的にベルリンと東京では随分とはなれてはいるが、お互いにM・エルンストに対し強い共感の共有がある。それがこの展覧会を可能ならしめたわけで、私としては深い感慨を憶えるのである。

1984年9月 佐谷画廊
佐谷和彦

編集・発行—佐谷画廊
Edited & Published by Satani Gallery

Copyright: Satani Gallery

Catalogue no.33-1984